現代語訳

# 四たび歌よみに与ふる書

連載第四回

正岡子規

拝啓。空論ばかりでは理解しがたいので、実例について批評せよとのお言葉、ごもっともと存じます。実例と言っても際限がないので、どれを取り上げて批評すべきだろうかと惑いますが、なるべく名高い人から試みてみましょう。柿本人麿の

もののふの八十氏川の網代木にいざよふ波のゆくへ知らずも

という歌がしばしば引き合いに出されるようです。この歌は万葉時代に流行した一気呵成の調べで、少しも野卑なところはなく、字句もしまっておりますが、全体的に見ると上三句は無駄なものになっています。同じ人麻呂の「足引の山鳥の尾のしだり尾の長々し夜を一人かもねむ」の歌は、前置きの詞は長いのですが、この歌は前置きの詞が長いことによって、夜の長いことを感じさせます。しかしこの「もののふ」の歌は、上三句がまったく役に立っていません。大勢のもののふと宇治川を掛けているので、宇治川という名所をよく歌ったものとされていますが、この歌を名所の歌の手本として引用するのは、大たわけです。総じて有名な地の歌というのはその地の特色がなくては叶いません。この歌のように意味のない名所の歌は、名所の歌にはならないのです。しかしこの歌は、後世の俗気がぷんぷんとした歌に比べればはるかに勝ります。かつまたこの種の歌は真似をすべきではありませんが、俗物歌の多い中に一首か二首あるのは、おもしろいかもしれません。

月見れば千々に物こそ悲しけれ我身一つの秋にはあらねど

という大江千里の歌は、最も人々が褒めている歌です。上三句はすらりとして難はありませんが、下二句は理屈であり、蛇足です。歌は感情を述べるものであるのに、理屈を述べるのは歌の本質を知らないゆえではないでしょうか。この歌の下二句が理屈であることは、消極的に終わっていることからも知ることができます。もし「わが身一つの秋と思ふ」と詠むならば感情的ですが、「秋ではないが」と当たり前のことを言っているので、理屈に陥ってしまっているのです。このような歌を「よい」と思うのは、その人が理屈から離れることができないためです。俗人は言うに及ばず、今の時代のいわゆる歌よみどもは、多く理屈を並べて楽しんでいるのです。厳格に言えば、これらは歌でもなく、歌よみでもありません。

芳野山霞の奥は知らねども見ゆる限りは桜なりけり

正岡子規

この歌は八田知紀の名歌とか言われております。知紀の歌集はまだ読んだことがありませんが、これが名歌ならばおおよその底は見え透いております。これも前の歌と同じく「霞の奥は知らねども」と消極的に言っているのが、理屈に陥っています。「霞の奥はわからないけれども」とすでに言っているのに、さらに「見ゆる限りは」と加えて、「見えないところはわからないけれども」と重ねているところが、下手というものでしょう。しかもこの歌の姿については、「見ゆる限りは桜なりけり」などと表現しているのもきわめて拙く、野卑です。前の大江千里の歌は、理屈こそ悪いものですが、姿は、はるかに立ち勝っています。ついでに申し上げると、消極的に言えば理屈になると申し上げたこと、いつでもそうなるというものではありません。客観的景色を連想していう場合は、消極的でも理屈にはなりません。例えば「駒とめて袖うち払う影もなし」と言っているのは、客観の景色を連想しているまでで、このように言わないと感情を表すことができないので、理屈に陥ってはいません。また全体が理屈めいている歌もあり（釈教の歌の類）、これらはかえって言い方によって多少の趣味が添うのでしょうが、この芳野山の歌のように、全体が客観的景色であるのに、その中に主観的理屈の句が混じっては、殺風景なことと言わざるをえません。

また同じ歌人の歌と思いますが、

うつせみの我世の限り見るべきは嵐の山の桜なりけり

という歌もやはりこの例です。さてさて驚き入った理屈の歌です。嵐山の桜が美しいと言うのは無論客観的なことであるのに、それをこの歌は理屈で表しているのです。この歌の句法は全体的に理屈の趣向の時に用いるべきなのに、この趣向の如く、客観的に言わなければならないところにこんな理屈を用いてしまっているのは、大俗のしわざと見えます。「べきは」と係けて「なりけり」と結んでいるところが、最も理屈的殺風景になってしまっています。一生嵐山の桜を見ようというのも、変なくだらない趣向です。この歌、全く取るところがありません。

今後も手当たりしだい申し上げていきましょう。

（明治三十一年二月二十一日／『日本』掲載）

〈現代語訳／五十嵐勉〉

※**八田知紀** 1863年（文久3年）薩摩より郁姫の入輿に伴って近衛家に仕え、勤王運動にも関わった。明治維新後、神祇省と文部省を兼務し、1871年（明治4年）宮内省に出仕した。翌年歌道御用掛を命じられ、宮廷歌人として活躍した。当時の最も権威ある宮廷歌人であった。

第5回

# 文芸思潮短歌季評

前号まで、新聞の歌壇を主に見てきた。主要紙に取り上げられる歌の低俗さに、あらためて日本の短歌の劣化を感じたが、では主要短歌誌はどうなっているのか、これからいくつかそちらの方面を見ていきたい。

角川の「短歌」二〇二三年六月号には巻頭作品として、平井弘、沖ななも、小島ゆかり、川野里子などの二十八首ずつが載っている。私はこれらの歌人を知らないし、これまで一度もその短歌に触れたことはないが、日本の短歌の伝統を担う角川の「短歌」なら、相当なレベルの歌が載っているだろうと、期待してページを開いた。

最初は平井弘の「羊をいっぴき」と題する歌群である。この指とまれのこのゆびなら握ってをりましたがはいそれはもう

古いことは別として覚えてゐるやつがゐなくなるのがいまごろ

夏草や誤りにきづいたところでそこそこ落ちつくものですが

これは何だ？　と、目を疑う。まさに目が点になってしまった。これ、短歌？　まさか角川の「短歌」がこんなものを巻頭歌として載せるの？　驚き、呆れてしまった。論評するのも言葉が汚れる。こんなひどいものが二十八首延々と続く。読んでいられない。

二番目は沖ななも（燉）の「残る桜」と題する歌群。

はばからず水面に枝をさしかわしはばからず咲く今年の桜

「散る桜残る桜も」明日までは散らずかがよう風にまかせて咲いただけの数は散るゆえさくらばな朝の歩道を埋め尽くしたり

桜を愛でてその美しさを表すのに、こんな貧弱な表現しかできないのか、あなたの命の感受性はこんなものか、と侮蔑せずにはいられない、拙劣な歌で、これも読み続けていくのに堪えない。「はばからず」を二度も遣っているその技巧の貧しさにも呆れるし、三首目の「咲いただけの数は散るゆえ」って、桜は算数じゃないんだよと、小学生からも言われそうな発想の惨めさには、目も当てられない。

三人目は「いま風の向きが変はつて」と題する小島ゆかり（コスモス）の歌群。

パルテノン神殿を空は記憶して量子コンピューターの世界を照らす

コンビニは途方に暮れて灯りをり古代のさくらふる夜のなかありしともあらざりしともさまざまのこと　思ひ出はさくらと同じ

わかったような、わからないような歌を作って、その韜晦さの中に逃げ込んで下手な趣きを出そうという魂胆が見え透いている。量子コンピュータなんてほんとうにわかってんの？　と言いたくなる。「思い出はさくらと同じ」だったら言う必要はないんじゃない？　とも。

川野里子（かりん）の「解体」。これは福島の津波による原発事故を素材にしているらしいが、重みは感じるものの、このような大災害をなぜ歌によって表現しなければならないのか、その必然性が感じられない。

黒瓦の屋根もりあがり反りうねり銛を打たれし鯨の形

消えた家生きている家死んだ家福島の町に早春の光

プランターのチューリップ赤しここになほ暮らしはありて玄関の前

原発に正面から向かい合うには言葉の深さ、鋭さ、怒りが足りない。所詮は他人事の災害歌に留まっている。

あとは似たり寄ったりの短歌誌になっているので、これ以上は見ないが、結局このレベルが現代の日本短歌の一つの指標だとすると、まったくもって心許ないことがよくわかった。日本短歌中央歌壇の斜陽劣化をよく象徴している。

あと、この号では釈迢空（折口信夫）に因んだ迢空賞が発表されているので、それに触れたい。

この賞は水原紫苑の歌集「快樂」に与えられたものだが、内容は先の四人よりもはるかによい。

紫のきはまるところ藤ならむ欲望の房長く垂れ嘔吐を誘ふ

ちちははの交はりを見し十歳のわれは極光放ちたりけむ金雀兒にふれむとせしが夭折の俳優なりき衣装のままに

これらは深いことは深いのだが、内面に潜む醜悪な部分を露出して、それを詠じてリアリズム的掘削によって太く濃い陰影を出そうとするところに、昇華から離れた濁りを感じる。それがさらに政治的なこと、歴史的なことに及ぶと歌から離れた余計な屈折が目立って鬱陶しく感じられる。

昭和天皇いまだ裁かれずその裔を崇むる不条理、太陽のごと

共和国につぽんが來むその日までいのち在らむかわれも短歌も

こんなことを短歌で言ってもしかたがないだろうと、思想も戦争への見識も首を傾げたくなる。これらが歌集全体を損ねていて、不協和音を奏でている。もともと短歌はその天皇家が基盤となって伝統を作ってきたことはどうなるのか、足元にも危うさが感じられる。私には、高橋陸郎の歌の方が地についたものと感じられた。

この迢空賞の選考委員を見て驚いた。佐々木幸綱、高野公彦、永田和宏、馬場あき子の四人は朝日日曜歌壇の選者ではないか。そっくりそのままの人が並んでいる。朝日歌壇のひどさにも呆れ果てたが、その四人がまたこの賞の選考委員になっていることにも、驚きと失望を禁じえなかった。いささかこの「まほろば」の誌にも縁のある折口信夫が現状を見たら、どう思うだろうか。

（五十嵐勉）